

# いまにつながる農村と都市の生活・文化

札幌市立平岡中央中学校 橋本敏昭

## 1 中世の授業構想

本単元で取り扱う時代は鎌倉幕府の成立から応仁の乱後の社会的な変化までの、およそ12世紀から15世紀ころまでの期間である。この時代は、武士の支配がしだいに全国に広まり、農業をはじめとする諸産業が発達し、畿内を中心とした都市や農村に自治的な仕組みが生まれ、武士や民衆の活力を背景にした文化が生まれた時代である。

授業構想の重点は以下の3点である。

### (1) 中世を大きくとらえるための工夫

生徒は社会的事象を個別のものとしてとらえる傾向があり、個別の事象を理解しても、それは部分でしかなく中世という時代のトータルなイメージ(全体像)がもてないのが実態である。全体像をとらえることのむずかしさは、中世だけにかぎらず他の時代についてもいえることである。中世を一つの時代としてとらえようとするとき、個別の社会的事象を意図的・計画的に相互に関連させるような教師からの働きかけが必要になってくる。また、学習のまとめについても、部分と全体との関係を重視し、相互のかかわりを意識したまとめの方法と時間の確保がたいせつである。

### (2) 課題解決的な学習

上記(1)を受けて、その時代を貫き、くぐることができるような課題を設定し、追究することによって時代を大きくとらえさせたい。生徒は目的と見通しをもって、課題と向かい合い、生徒自らが社会的事象に関心を持ち、自ら学びをすすめていくような課題設定を考えたい。

### (3) 基礎・基本の確実な定着

基礎・基本の確実な定着が必修教科では重要である。ここでいう基礎・基本とは、学習指導要領で示された内容とする。自ら学び考える学習体験、また学び方や調べ方の習得については上記(2)で示した課題解決的な学習が有効である。また、他の時代との比較などを通して、学習したことを他の学習場面で活用するような学習を意図的・計

画的に実践を繰り返すことによって一過性の学習から脱却し、基礎・基本を確実に定着させる。

## 2 具体的な手立て

### (1) 中世を大きくとらえるための工夫

- ①古代との比較：政治の展開、産業の発達、社会のようす、文化の特色などに着目して、古代との比較を通して相違点や共通点を明らかにし、中世の特色を理解させるようにする。
- ②視点の多元化・複眼化～マップ法の活用～：授業時数が削減されたことにより、これまで以上に政治、産業、社会、文化などを関連づけて取り上げるとともに、視点の多元化、複眼化が必要である。相互の関連性を考え、位置的・関連的にとらえようとする場合、マップ法の活用が有効である。
- ③資料の有効活用とイメージ化：中世という時代の全体像のイメージをもたせたい。具体的には、絵巻物や視聴覚教材などで、農業・商業・手工業の発達のようすを具体的に読み取り、能や狂言についてイメージをもてるようにする。
- ④導入段階と最終段階：導入段階では、資料や年表を活用して時代の全体像を概観し、イメージをもたせる。能や狂言、銀閣のある慈照寺の東求堂同仁斎(書院造)など、伝統的文化や歴史的建造物を見せ、伝統的文化に対する興味・関心を高める。自分とのかかわりがもてるような資料の提示をすることによって、生徒の興味・関心を高めたい。

最終段階では中世を大きくとらえることができるような単元全体のまとめをする。

### (2) 課題解決的な学習

- ①単元(中世)を貫き、くぐられる課題の設定  
ここでは、中心課題を次のように設定した。

武士や民衆は、どのようにして力をつけてきたのだろう。

中心課題を設定するに当たって、とくに意識したことは以下の点である。中心課題は、

- ・単元を貫き、くくられるものであること
- ・追究することによって、単元の目標に迫ることができるものであること
- ・課題に対するイメージがもちやすく、課題の共有化が容易であること
- ・個別の事象について、相互のかかわりを意識しやすく、発展性があること
- ・時数削減の中で、短時間で課題設定ができるものであること

## ②課題とまとめの活動との一貫性・連続性

まとめの活動を独立させることは、時間的に困難であり、そのため中途半端になったりする。課題の追究・解決、そしてまとめまでを連続したものになるような取り組みにした。

### (3) 基礎・基本の確実な定着

既習事項の古代との比較を政治、産業、社会、文化などの観点で行う。古代の内容はこの単元(中世)の学習を支える基礎的・基本的な学習内容である。また、中世の学習を通して古代の学習はより確かなものとして定着する。

## 3 授業の展開 (5時間扱い)

### ◆1 時間目

- ・能や狂言のビデオを視聴し、現代文化とのかかわりや自分とのかかわりに着目する。
- ・視覚的資料・絵図を見て、時代のイメージをもつ。
- ・年表を活用して中世の流れを概観する。
- ・文化の担い手が武士や庶民に移ったこと、産業や社会が発展したことを知る。
- ・課題を設定する。

武士や庶民が力をつけてきたようすをマップで表してみよう。

〔資料を見る視点〕

資料を提示して、この資料からどのようなことがわかるかとたずねても、生徒は答えにくい。たとえば、この資料の中には何が描かれているか、「誰が」「何を(何が)」「いつの時代」「どこで」など具体的な視点を指示した方が、生徒は答

えやすい。

〔提示する資料の例〕



▲(5) 14世紀の部屋 (『藤村絵詞』西本願寺蔵)



▲(6) 銀閣のある慈照寺の東求堂同仁齋 (京都府)

帝国書院『中学生の歴史(最新版)』p.85

### ◆2・3 時間目

- ・農民や庶民が力をつけてきたことと関係がありそうなものを調べて書き出し、発表する。
- ・関係の深いものをグルーピングする。
- ・順序や位置を考える。

### ◆4 時間目

- ・マップを使って、小グループによる発表と交流を行う。マップを練り上げる。

### ◆5 時間目

- ・全体で交流し、まとめる。

1時間目の中世の概観の学習は、「いまにつながる農村と都市の生活・文化」の1時間目ではなく、中世の学習の1時間目(「鎌倉幕府と元寇」の前)においた方が単元構成上より効果的である。

## 4 マップ法

武士や民衆が力をつけてきたことと関係があるものには、「どのようなものがあるのか」(事実の把握・確認)さらに「それらは相互にどのようなかかわりがあるのか」(因果関係の明確化)について、マップ法を用いて取り組ませる。マップ法は、関連性・発展性・順序性のある題材を扱うときに有効である。

マップ法を用いることによって、以下のような

生徒の学びが期待できる。

(1) 興味・関心と主体的な学び

結論（ゴール）がみえているので、この単元で何を学習するのか、生徒からみて明確である。また、謎解きのような学習なので、生徒の興味・関心の高まりが期待でき、生徒自らが学びをすすめていくことができる。

(2) 資料活用と多面的・多角的なものの見方・考え方

追究の過程において、生徒自らが教科書や資料集などを活用して、解決しようとする。そこでは、資料活用の力、多面的・多角的なものの見方・考え方の高まりが期待できる。

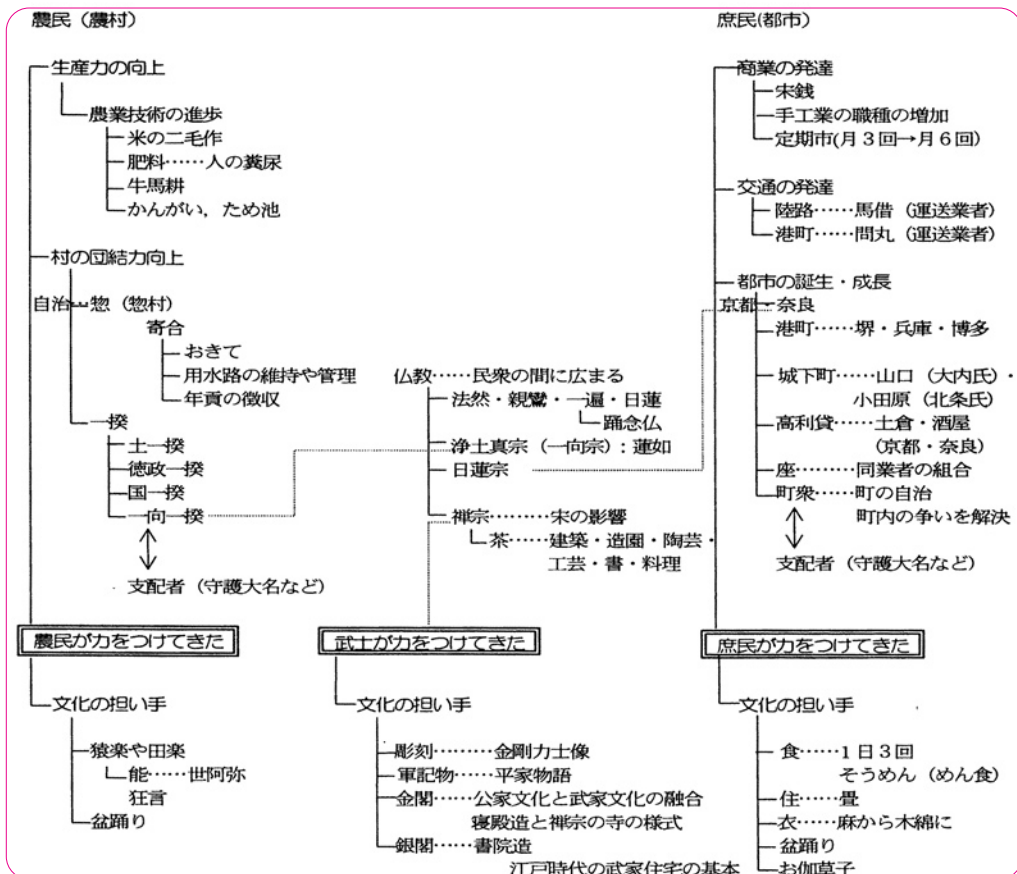
(3) 交流の情報源

マップ法は位置的・関連的に表現するので、個々

の社会的事象を視覚的にとらえるのでわかりやすい。文章や説明よりも簡潔に表現されるので、交流の場面で自他の共通点と相違点を見つけやすく、交流が成立しやすい。

5 おわりに

本校の教科カリキュラムの関係上、まだ帝国書院の教科書を使用している本単元の実践は行っていないため、検証は当然できていないが、課題解決を生徒自らすすんで実施していくような配慮がなされているこの教科書を活用し、生徒の理解度を高める授業を構築していきたい。また、時間数削減の中で、今後は選択社会との関連を図ることが有効であると思われる。



〔備考〕  
 ・幕府・大名・武士に関する部分のマップは省略する。  
 ・帝国書院『中学生の歴史（最新版）』を使用してまとめた例である。  
 ・より深く追究することによって、マップで示した事項の位置関係や線が追加・修正される。